

日本語を母語としない外国人不妊治療患者の受診に伴う不安の様相

太田 恭子¹, 岩谷 賀奈¹, 皆吉 田津子¹, 中岡 義晴¹, 森本 義晴²

¹IVF なんばクリニック ²HORAC グランフロント大阪クリニック

【目的】

近年、わが国の在留外国人数は増加し、2025 年 6 月末には統計開始以降最多を記録した。20 代・30 代が半数以上を占め、生殖可能年齢層が多いことが特徴である。当院においても外国人患者は年々増加しており、不妊治療の保険適用開始以降、日本語を母語としない患者の受診が増加している。現在は通訳者を介した診療を行っているが、治療理解が優先され、患者の思いに配慮した看護実践が行われにくい現状がある。今回、日本語を母語としない外国人不妊治療患者が受診時に抱える不安の様相を明らかにし、看護支援のあり方を検討することを目的とした。

【対象と方法】

2022 年 4 月から 2025 年 12 月末までに当院で一般不妊治療または体外受精を受療した日本語を母語としない外国人女性患者 61 名を対象とした。Google フォームを用い、出身国の主要言語に翻訳した無記名自記式質問紙による Web アンケートを実施した。質問内容は治療理解、医療者とのコミュニケーション、心理的負担、支援ニーズに関するものである。

【成績】

医療者による治療説明について約 60%が概ね理解できると回答した一方、医学用語や検査・処置の説明に難しさを感じており、理解と困難が併存していた。不安やストレスは「少し感じる」が 50%、「とても感じる」が 12.5%で、その背景には説明内容の理解不足や費用への不安が挙げられた。医療者との関わりの中で安心できる場面は全員が「ある」と回答し、図や資料を用いた説明、ゆっくりとした説明、傾聴や丁寧な声かけが安心感につながっていた。今後希望する支援としては、多言語資料や図・イラスト中心の説明を求める声が多かった。

【結論】

日本語を母語としない外国人不妊治療患者は、説明理解の一部に困難を抱え不安やストレスを感じる一方で、医療者の関わりにより安心感を得ている様相が示された。不安と安心が併存する受診過程の中で、理解度や心理的側面に配慮した看護支援の工夫が求められる。